ジャン=マルク・タンゴー　写真家

内なる場所

文 TEXTE CAROLINE BÉNICHOU カロリーヌ・ベニシュ

見たところ、生きものの姿はない。あるのは情景で、それを題材として、作品が構成されている。喧噪から離れ、世界の波瀾や無秩序から遠く離れた情景。光が穏やかに流れている。かすかに亀裂が入り、ひび割れた壁の上の写真はやはり、画鋲で留めてあるようだ。色々なものが、あちこちに散乱している。何も動かない。

その時、作者の思惑が少しずつはっきりと表れてくる。初めは遠くに聞こえるこだまのように。それから突然、遠い日の記憶が呼び戻される。そして作者の意図を理解するのだ。それはナポリ、ザグレブ、マラケシュ、エルサレムなどの町を一本の細い糸でつなぎ、それぞれを結びつけてゆくこと。ありふれた風景が、この写真家の手によって、その無意味さを失なっていく。内面が表れて、秘められていたものが少しだけ明らかにされる。そして、そこに暮らす人たちの姿もまた、わずかに見えてくる。ジャン・マルク・タンゴの写真は時を語る。過ぎ去っていく時、とどまっている時、そして焼き尽くされていく時。その写真は、さまざまな場所や、そこにまつわる思い出を蘇らせる。彼は、心の奥底にしまわれた場所を思い出させるために、過去の痕跡や唐突に現れたものの力を借りているのだ。慎ましく、そして多くの場合は重々しく、余分なものを削ぎ落とされた鋭い感性の写真は、そこに見える以上のものを思い出させる。そしてその時、写っていないものや、写されたものの断片から、微かな音が聞こえてくる。それは物語や出来事、また時には歴史そのもののつぶやきだ。

生きものの姿はない。しかし、それぞれの写真は、何か存在するものの力によって、微かにざわめいている。

ジャン=マルク・タンゴーは、フランス中部のモルヴァン地方出身。ラテンアメリカに滞在していた1973年に写真を始める。以来、世界を渡り、個人的な仕事と、広告や出版の分野での活動を同時に繰り広げている。東京、トリノ、ニューヨーク、パリなどで作品展を開催。作品集は、『モルヴァンの人たち *Gens du Morvan*』(1978年)、『思い出 *Mémoires*』(1986年)、『愛のオブジェ *Objets d'amour*』(1988年)、『インテリア*Intérieurs*』(1992年)、『メディナ*Médinas*』(1998年)などがある。